

本県における雑草イネの出芽動態 (第3報)

1 背景・目的

雑草イネは栽培品種に混ざり生育し、玄米果皮が赤いため製品に混入すると等級落ちや減収を招くことから、全国的に問題となっている。

雑草イネは脱粒性が高く、ほ場に落ちた種子は翌年以降の発生源となるが、本県における出芽時期等の動態(出芽動態)は明らかになっていない。そこで、除草剤等による防除対策の基礎資料とするため、出芽動態を調査する。

2 技術のポイント

- (1) 出芽は表層、土中に関わらず、種子が落ちた翌年(1年目)には全系統で確認され、うち1系統(C系統)では翌々年(2年目)にも確認された(図)。
- (2) この1系統では種子が落ちた2年後でも生存種子が0.5%確認されたため(データ略)、種子が落ちた3年後でも出芽する可能性が示唆された。

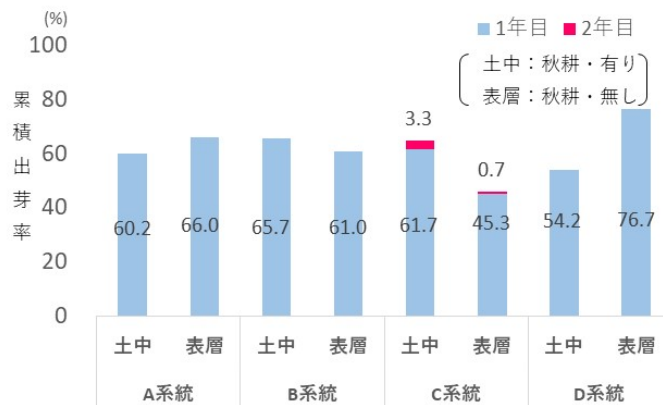


図 雑草イネの累積出芽率 (2020年秋播種、2020年秋～2022年秋)

3 成果の活用と残された問題点

- (1) 除草剤等による防除対策は少なくとも3年は継続して実施する必要がある。
- (2) 発生ほ場における後作は、大豆等の畑作物又は水稻の場合は直播栽培を行わず移植栽培とし有効除草剤の体系処理を行う。
- (3) 収穫後ほ場に残留した雑草イネ種子は、土壌とともに作業機械に付着し、他ほ場に拡散して翌年以降の発生源となるため、機械の洗浄徹底と作業を行うほ場の順序(発生程度の少ないほ場から多いほ場の順)に留意する必要がある。

問合せ先：作物栽培グループ TEL 076 - 257-6911

担当者：中野知行、島田雅博

※本研究は、農林水産省委託プロジェクト研究「直播栽培拡大のための雑草イネ等難防除雑草の省力的防除技術の開発」の支援により実施した